

# こども支援アセスメント通信 vol.7

## コミュニケーション スキルアップ★COM

## 「伝わる書き方」～ケース支援記録と連絡帳～

### 「ケース支援記録」は「連絡帳」と兼ねられる？

児童発達支援や放課後等デイサービスの事業所の業務に「ケース支援記録」(※)の記載があります。

(※)ここでの「ケース支援記録」とは、サービス履行確認を目的とする「サービス提供実績記録票」ではなく、サービス利用日のお子さんへの支援内容を個別に記録したものを指しています。

このケース支援記録を「保護者との連絡帳と兼ねている」という事業所が多く見られます。その日のお子さんの様子について職員が記載するという点では同様ですし、職員の記録の効率性を考え、このような方法をとっている事業所が多いのでしょう。しかし、ケース支援記録と連絡帳の両方を兼ねることは、それぞれの記録の目的を考えると難しいことだと思うのです。

### 何のために、誰に何を伝えるのか

下表にケース支援記録と連絡帳の目的等をまとめました。

ケース支援記録は、職員間での場面の共有と支援の考察を行い、事業所として一貫した支援を行うための記録で、個別支援計画のモニタリングの際の根拠資料になります。職員間での共有が必要な情報(個別支援計画の目標に関連するその日の支援エピソードや特記事項等)について、職員の誰が読んでもその時の状況が分かるように、客観的情報と主観的情報を分けて簡潔に記載します。

一方、連絡帳は、日々の連絡事項や、悩みや質問をタイムリーに伝える等、保護者と事業所間のコミュニケーション手段であり、また関係性を築く手段にもなります。面接と同様に、相手の思いに寄り添いながら、相手に分かりやすい言葉で伝える等の工夫や配慮が求められます。

### 【ケース支援記録と連絡帳の比較】

	目的	伝える相手	記載する内容	書き方(伝え方)の工夫
ケース支援記録	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 個別支援計画策定のためのモニタリングにおいて、事業所での支援経過を振り返るために必要な記録。</li> <li>▶ 事業所職員間で情報共有し、一貫性のある支援を提供するために必要。</li> </ul>	事業所職員	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 本人の様子(言葉、行動)他職員からの情報[事実]</li> <li>▶ 本人の様子についての支援者の判断・解釈[評価]</li> <li>▶ その時の職員の支援・対応</li> <li>▶ 今後の対応予定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ どの職員が見てもお子さんの状態・様子が再現できるよう、<b>事実(客観的情報)と考察・評価(主観的情報)を分け、簡潔に記載する。</b></li> <li>▶ 必要な情報を記録からすぐに把握できるよう、内容を整理して記載する。</li> </ul>
連絡帳	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 利用日のお子さんの様子について保護者と確認し合うための情報共有ツール。</li> <li>▶ 保護者との関係性構築につながる。</li> </ul>	保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 事業所、家庭でのお子さんの様子(その日の活動内容、お子さんの様子等)</li> <li>▶ 家庭、事業所への連絡事項(体調確認、利用日の変更、利用で気を付けてほしいこと、相談・質問等)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ お子さんの様子や事業所から伝えたいことを、<b>保護者に分かりやすい言葉</b>で伝える。</li> <li>▶ 活動の様子の写真を添付する等、工夫している事業所もある。</li> </ul>

「書く」という作業は、自分の中の考えを整理して見える形にする作業です。これは相手にわかりやすく伝えることにつながります。「書くこと」もコミュニケーションとして重要な方法と言えます。

記録の目的や伝える相手、記載内容、その書き方(伝え方)について、職員間で整理・共有していきましょう。事業所の一貫性のある支援や保護者との信頼関係の構築につながっていくはずですよ。

# 気になる子どもの アセスメントミニ講座

来年就学なので、そろそろ  
お箸を使えるように練習を  
させたいのですが…



## 今回のテーマ 「道具の持ち方」

- 「鉛筆で書くことや、スプーンで食べることが難しい」
- 「来年就学なので、箸で食べる練習をさせたい」
- 「はさみの使い方がぎこちない」

食事や創作活動の場面で気になるのが「道具の使い方が不器用なお子さん」です。本人なりに一生懸命取り組んでいるのですが、どうも不器用でぎこちなく、食べこぼしたり、思うようにできず嫌になって投げ出してしまったり、いろいろな場面でうまくいかないことが増えてしまいます。お子さん自身も「うまくできない。やりたくない」と苦手に感じれば、当然活動を避けがちとなり経験の機会も少なくなってしまいます。

身体の動かし方は、年齢がきたら自然と出来るようになるものではありません。それまでに様々な経験をし、お子さんの身体・感覚によって効率の良い動きを学習することにより、獲得していくものです。

例えば、道具の持ち方にも順序があります。ここでお子さんの道具の持ち方を観察してみましょう。

### [握り動作の発達]

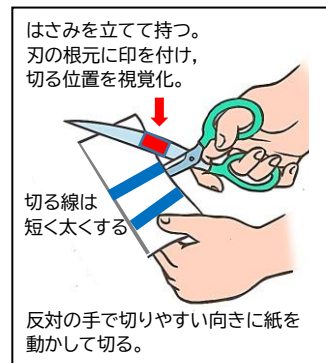
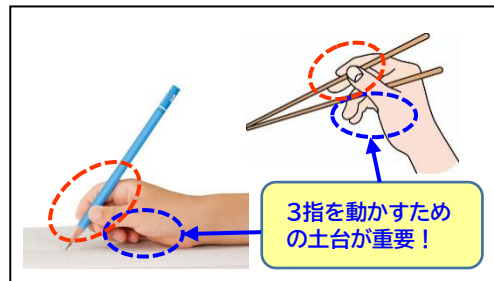
手掌回外握り 手掌回内握り	手指回内握り	静的3指握り	動的3指握り
<p>手のひらで握り込んで持つ。 （手のひらが上向き→回外） // 下向き→回内</p>	<p>手のひらでなく 指先で把持する ようになる</p>	<p>3指で把持するが あまり動かせない</p>	<p>3指の先で 把持して自由に 動かせる</p>

最初はギュッと手で道具を握りしめていた持ち方も、だんだんと3指（親指、人差し指、中指）だけで動かすことができるようになります。鉛筆やスプーンをこの3指で操作することができると、箸の練習へとスムーズに移行できます。箸は、上側の箸をこの3指で動かして使うものだからです。

3指を自由に動かすためには、実は薬指と小指が重要です。これらの指は3指を動かすための土台として働きます。安定した土台があることで、3指だけで道具を細かく動かすことが可能になるのです。

基本的に、はさみは親指を上にして刃を開閉しながら、刃の先ではなく根元で切ります。開閉のコントロールが難しい段階では、1～2回の開閉で切れる太く短い線の練習から始めます。刃をあてる位置に色を付け、切る時に刃を当てる位置を意識づけます。長めの直線が切れるようになったら、四角形や円で、角や曲線をはさみではなく紙の方を動かして切る練習をします。

道具を使う時の動きの特徴や手の発達について知っておくことは、活動中のお子さんを観察する際の視点となり、またお子さんに必要な支援をスモールステップで考えるのにとっても役立ちます。お子さんに「うまくできて楽しい」と感じてもらえる支援を考えるために、支援者自身が、活動を考える際に、事前に道具を動かしてみて、自分の身体で感覚や動きを確認してみingことをお勧めします。



これまでの通信は当所ホームページに掲載されています。  
<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/sd-hohuku/reha-reco-kodomo-assesment.html>  
 (「仙台 リハレコ」で検索) QRコードはこちら→



[発行・問い合わせ先]  
 宮城県仙台保健福祉事務所健康づくり支援班  
 〒985-0003 宮城県塩竈市北浜4丁目8-15  
 TEL/FAX : 022-363-5503 / 022-362-6161  
 メール sdhwfzke@pref.miyagi.lg.jp